

# 1936年以降の体操科における「技術」習得と人格陶冶

— 篠崎謙次の論考を手がかりとして —

藤川 和俊 (東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)

## Acquiring “technique” and forming character in physical education after 1936 — Analysis of articles of Kenji Shinozaki —

FUJIKAWA Kazutoshi

(The United Graduate School of Education Tokyo Gakugei University)

### Abstract

According to previous studies, acquiring “technique” came to be related to forming character after 1936. This study considers how Kenji Shinozaki thought about acquiring “technique” to contribute to forming character to clarify the factor that acquiring “technique” took root in physical education. The historical materials used in this study are journal articles of Kenji Shinozaki published after 1936.

The results of this study are summarized as follows:

- 1) Based on the theory of Sukeichi Shinohara and consideration about development of “technique”, Shinozaki thought “technique” as the expression of the spirit and character. And he thought forming character as unify the spirit with body by the acquiring “technique”.
- 2) Shinozaki thought that it was necessary to make traditional training of Japan an ideal for forming character by acquiring “technique”. Concretely, he thought that following two were indispensable. First, it is to rouse longing of students for exercise. Second, it is “spiritual movement” which consists of “willing movement (effort for the realization of longing)” and “restrained movement (restraint of the harmful desire)”.
- 3) In order to rouse longing, Shinozaki thought it was effective in free gymnastics to compare the “technique” by aiming for the skillful student or observing each other. On the other hand, in gymnastics, he thought it was effective to aim for acquiring “technique” first, and raising the workmanship next. In addition, he thought it was indispensable to aim for acquiring “technique” which matches each student’s skill.
- 4) As regards “spiritual movement”, it was emphasized in gymnastics that the students made an effort for a long term to acquire “technique”. This is a concrete example of “willing movement”. However, Shinozaki didn’t mention “restrained movement”.

As described above, it is considered acquiring “technique” to contribute to forming character was incomplete. However, the view that acquiring “technique” has the usefulness that rouses longing for exercise of students kept existing from the 1920’s. Therefore, it is considered that usefulness to rouse interest and longing for exercise became the factor of acquiring “technique” in physical education class after 1936.

## はじめに

現代の学校体育においては、運動技術が指導内容に位置づけられており、運動技能の習得が学習成果として期待されている。しかしながら、これまで学校体育では、運動技能の習得に関して様々な批判がなされており、なぜ運動技能を習得するのかということや、その習得のあり方を考察することが求められている<sup>1)</sup>。このような現代の問題について考察するうえで、なぜ「技術」<sup>2)</sup> 習得が学校体育に定着していったのかを歴史的に明らかにすることは意義があると思われる。

近代日本の学校体育では、1913（大正2）年の「学校体操教授要目」（以下要目）において、「体操科に於て行わしむる事項は生徒の身体及精神を陶冶するに在るを以て常に其の目的に副わしむることを期し徒に技術の末に走るが如きことあるべからず」<sup>3)</sup>と記され、続く1926（大正15）年改正要目でも、「徒に技術の末に走るが如きことなく」<sup>4)</sup>と注意されていた。しかしながら、1936（昭和11）年の要目改正の際には「従来動もすれば体操科の教授が技術の末に走り、方法に捉われて、身体の修練、技術の習熟のみを以て足るかの如く見られ易い欠点があった」<sup>5)</sup>との批判がなされており、再三の注意喚起にもかかわらず、1920-30年代の体操科授業は「技術」習得の追求に終始していたことがわかる<sup>6)</sup>。また、その要因として、「技術」習得には「児童・生徒に教師を尊敬させること、運動への興味を高めること、そして授業の成果を明確に示すことといった」<sup>7)</sup> 授業の円滑な展開を保證する有用性が存在していたことが指摘されている。

1936年になると、要目に「人格を陶冶する」という文言が登場し、体操科授業は人格陶冶にいかにかに寄与するかという方向へ向かっていく。このような時代にあって、二宮文右衛門は、篠原助市の理論に依拠し、「技術」習得が「人格の完成」に寄与すると考えるようになった<sup>8)</sup>。篠崎謙次も、1936-37（昭和11-12）年に、「篠原の『自然の理性化』という命題に論拠を」おき、「体育の理想

とする人格陶冶はいかにして可能か」を問題にしていたという。そして、「技術は人格的意味を内在」するとして、「人格陶冶の根本的契機としての技術（＝堪能）を力説している」<sup>9)</sup>とされる。ここから、篠崎も二宮と同様、篠原の理論を基盤として「技術」習得が人格陶冶に寄与すると考えていたことがわかる。

以上の指摘は、1936年頃を境とし、体操科における「技術」習得の価値づけが、授業の円滑な展開を保證するという二義的なものから、人格陶冶という要目の目標に直結するものへと高まったことを示唆している。このことは、「技術」習得が体操科授業により深く定着していく契機になったと考えられる。しかしながら、従来の研究は、日本ファシズム体育思想という視点から篠崎の論考を検討しており、「技術」習得と人格陶冶の関係をどのように説明していたのかということや、いかにして「技術」習得が人格陶冶に寄与するようになるのかということは明らかにされていない。「技術」習得の定着要因について解明するためには、人格陶冶に寄与する「技術」習得の考え方が実践理論としてどのように具体化され、現場に浸透していったのかを明らかにする必要がある。

そこで本研究では、篠崎謙次が1936年以降に発表した雑誌論文にあたり、篠崎が人格陶冶に寄与する「技術」習得についてどのように考えていたのかを検討、考察する。篠崎は、「従来の体育には人格陶冶という視点が欠如していると批判」<sup>10)</sup>するとともに、「体育の理想とする人格陶冶はいかにして可能になるか」を問題にしていた人物と評価されていることから、実践を念頭におきながら「技術」習得について論じていたと考えられる。つまり、人格陶冶に寄与する「技術」習得について、実践理論への具体化という視点から検討するうえで重要な人物といえる。

史料については、篠崎が1936年以降に発表した雑誌論文を使用する。使用する雑誌は、第一に、先行研究でも用いられていた『体育と競技』である。第二に、新出の史料として、『小学校体育』

を使用する。この雑誌は、1936年10月に成美堂によって創刊され、「執筆者及び賛助員」には二宮文右衛門、野口源三郎、岩原拓、森秀、宮田覚造など、要目改正委員として当時の体育界を牽引した人物が含まれている。したがって、体操科授業に少なからず影響力を及ぼしていたと考えられる。また、創刊の意図として、「実践的問題を解決する為に、特に研究範囲を小学校に限り、専ら児童体育にその対象を置き、最も具体的にして而も現代人の要求に適合する全然新しき指導体系を以て雑誌『小学校体育』を刊行することになった」<sup>11)</sup>と記されているように、実践に焦点をあてた雑誌といえる。つまり、当時の体操科における実践理論について検討するうえで有効な史料と考えられる。

以上を踏まえ、本研究では以下の手順で検討を進める。第一に、篠崎が「技術」習得と人格陶冶の関係をどのように説明していたのかを明らかにする。第二に、篠崎がどのようにして「技術」習得が人格陶冶に寄与するようになっていたのかを明らかにする。第三に、篠崎が自身の「技術」習得に対する考え方を実践理論としてどのように具体化したのかを明らかにする。これらの課題を解明することにより、「技術」習得が定着していった要因の一端を明らかにすることができると考えられる。なお、本論文では、史料引用の際、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めた。

## 1. 篠崎謙次の略歴

篠崎謙次は、1911（明治44）年4月30日、栃木県に生まれた。東京文理科大学教育学科を卒業後、1936年2月から1939（昭和14）年3月まで愛媛県師範学校教諭及び同男子附属小学校訓導として活動する。以後、東京府立高等学校、東京文理科大学副手（心理学教室兼教育相談部勤務）、佐野高等女学校教諭、栃木県師範教授を経て宇都宮大学教授、同附属小学校長、同幼稚園長となった人物である<sup>12), 13), 14)</sup>。

愛媛県師範学校在任中の1936年には、「第十六回愛媛教育研究大会」において、研究教授として

「尋五男体操教授」を担当するとともに、研究発表では「体育指導上の諸注意と教師の態度」<sup>15)</sup>を発表した。篠崎自身も、「私は所謂研究教授を数回行って来たし又幾回となく見せられもした。そしてこれ等は今後共しばしば繰り返されて私に与えられることであろうと思う」と述べ、また「私は又色々な人の授業をみた。そしてそれ等を一々批評せねばならぬ立場に置かれた」<sup>16)</sup>という。さらに、「ある学校の五年生の児童をたのまれて指導した」<sup>17)</sup>ことがあったと述べている。研究教授を任されることが多く、また他の学校から授業を依頼されていたことから、篠崎の体操科授業実践は高く評価されていたといえる。また、他の教師に対して指導的役割を担っており、理論的な側面からも評価されていたと考えられる。それは、篠崎が1936年以降の体育雑誌に40編以上の論文を著していたことからわかる。以上のことから、篠崎は、実践、理論の両面から評価されていた人物であり、彼の実践理論は体操科授業実践に少なからず影響を与えたと考えられる。

## 2. 「技術」習得と人格陶冶の関係

まず、篠崎が「技術」習得と人格陶冶の関係をどのように説明していたのかを明らかにしていく。先行研究で指摘されるように、篠崎は人格陶冶に寄与することが体育の理想と考えていたが、1936年11月の「体育要論（一）」で、「身体がもつその事実的意味を知る事なしに吾々は体育の意義を論ずる事は出来ない」<sup>18)</sup>のように、体育の意義、いかえれば体育における人格陶冶を考えるためにはまず身体の意味を明らかにする必要があると述べている。このような問題意識から、篠崎は身体と精神の関係について取り上げ、以下のように述べている。

精神はどこに存在しているのであろうか？  
即ちそれは吾々の実体としての身体が、吾々の行動的環境（行動的環境の章参照）と時間的、空間的關係を結ぶその關係に於て生ずるものである。もっと平たく之を言うならば、

表1 篠崎謙次の雑誌論文一覧

雑誌名	年	巻	号	ページ	論考名
体育と競技	1936	15	5	10-13	奉仕の精神に就て(一)
	1936	15	6	62-65	奉仕の精神に就て(二)
	1936	15	11	2-8	体育要論(一)
	1936	15	12	14-27、90	体育要論(二)
	1937	16	3	5-12	体育要論(三)－意志陶冶論－
	1937	16	4	7-13	体育要論(四)－意志陶冶論－
	1937	16	5	12-15	体育要論(五)－意志陶冶論－
	1937	16	6	14-27、64	闘志の発現に関する実験的研究
	1937	16	8	12-16	体育要論(六)
	1938	17	6	7-9	いわゆる意志教育に於ける誤謬
	1938	17	12	26-32	体育の根底
	1939	18	2	33-36	体育の根底(二)
	1939	18	3	30-34	体育の根底(三)
	1939	18	11	40-43	入試身体考査への希望
	1940	19	6	57-60	体操教授の手記
	1940	19	7	65-70	体操教授の手記(二)－徒手の体操－
	1940	19	9	38-44	体操教授の手記(三)－教授の力動的進行－
	1940	19	10	45-49	体操教授の手記(完)－器械の運動－
	1940	19	12	62-68、14	技術の考察
小学校体育	1937	2	11	21-25	体操に対する好き嫌いとその理由
	1937	2	12	30-35	体操に対する好き嫌いとその理由(二)
	1938	3	1	30-37	体育に対する根本態度を論ず
	1938	3	5	35-39	入学試験と体操科
	1938	3	7	69-71	体操科の研究教授について
	1938	3	12	27-33	科学と養生
	1938	4	1	38-41	科学と養生(続き)
	1939	4	2	18-22	科学と養生(三)
	1939	4	8	108-111	健康教育への提言
	1939	4	10	31-39	体操教授に於ける要求水準(一)
	1939	4	11	80-85	体操教授に於ける要求水準(二)
	1940	5	1	70-78	徒手体操教授の悩みとその解決
体操	1939	9	8	10-13	勤労奉仕の精神
	1939	9	11	22-23	体錬賞とその規格
	1940	10	1	20-21	体操教師の夢
	1940	10	2	14-18	身体検査実施に於ける二・三の問題
	1940	10	3	4-5、45	女性の心理と体育
	1940	10	6	51-53	強歩検定大会の成果
	1940	10	11	5-8、18	研究教授に於ける教師
学校体錬	1941	1	3	43-46	技術と修練
	1941	1	4	38-41	体育と体錬
	1941	1	8	21-25	訓練の優位

吾々の目が外界の物を見開き、手に触れると  
いうその関係に於てそこに一つの異った心的  
動きを感じるといふのだ。だから心は目にも  
耳にも手にもそれぞれの働きとして現われる

ものでなければならない。

篠原教授は体育私言中に「手の先、足の先  
にも心がある。手は心である。だから吾々は  
身体を教育する。」という意味の言葉を暗示

的に投げ与えているがその意味は要するに身体の時空的関係に心を求めたに他ならぬ<sup>19)</sup>。

この言及から、篠崎は篠原の理論に依拠して、身体が外界の物と関わることにより、身体の働きとして精神が現れると考えていたことがわかる。

このような身体と精神の捉え方を前提として、篠崎は「精神が動作に現われ人格が技術に表現せられるとはかかる自己（精神身体を含む）と行動的環境内の物とが吾々の人生或は生活の中で重要な意味を見出した時に於てである」<sup>20)</sup>と述べている。ここから、篠崎は自己と外界の物とが関係を結び、意味づけを行うことによって「技術」が人格と関係をもつようになって考えていたことがわかる。また、両者の関係について以下のように述べている。

体育としての技術はそれが意志の自己表現であり、精神と肉体との寸分隙なき統一であり、静止せる人格が直ちに全き動としての人格にまで表現せられる事ではなければならない。つまりは創造としての自己実現が技術に現われ、それはやがて自己の個性の中に於ける陶冶価値の実現となって人格価値にまで高まるのである<sup>21)</sup>。

このように、篠崎は、「技術」は自己の意志や人格を表現するものであり、「技術」を習得することは、精神と肉体とを統一することと捉えていた。そのため、「技術」習得により「意志の自己表現」、「自己実現」が可能になり、「技術」が「人格価値」と関係をもつことになると考えていたのである。また、篠崎は1937年5月の「体育要論（五）一意志陶冶論一」でも、篠原の言葉を引用しながら以下のように述べている。

篠原博士は「身体は精神の顕現様相であり意志実現の機関であるが故に身体の教育は又意志の教育である」という意味の言葉を投げている…中略…かかる意味に於て身体は是非

共意志と完全に一致する方向に働かなければ人間の身体（人格的な身体）としての意味を失うであろう。それ故体育が人格陶冶であるという事は、身体を人間のものとしての、人格的な意義に建設する事に他ならず、意志と身体との寸分隙なき統一こそかかる目的を満す唯一のものでなければならない<sup>22)</sup>。

この言及から、篠崎は「意志と身体との寸分隙なき統一」即ち「技術」習得によって意志を実現することが篠原の述べる意志の教育であり、体育における人格陶冶と考えていたことがわかる。また、意志と身体との統一が人格陶冶という目的を満たす唯一のものであり、そうでなければ人格的な身体としての意味を失うと述べていることから、「技術」習得が人格陶冶に不可欠と考えていることが明確である。そのため篠崎は、「意志と技術の方向とを完全に一致させる様に体育する事が必要である」<sup>23)</sup>と述べている。以上のように、篠崎は「技術」を意志や人格の表現と捉え、「技術」習得によって意志と身体を統一し、意志を実現することが、人格陶冶に寄与する体育のあり方と考えたのである。

しかしながら、篠崎は1936年12月の「体育要論（二）」で、「吾々は何故に技術を目して自己実現、人格実現と見做すか。この問題を解決せんとすればその発生的な考察に依って技術が精神的なものとして生来した事を知るより他ないであろう」<sup>24)</sup>と述べている。つまり篠崎は、篠原の理論のみではなく、「技術」の発生的考察にも依拠して「技術」習得と人格陶冶の関係を説明していたのである。

では、篠崎は「技術」の発生についてどのように考えていたのか。以下のように述べている。

人々は世界の統率者として世界歴史を創造し動植物や自然に対する自己の生活の卓越を求めんとして凡ゆる自由運動性を利用した。人々は木をこすり合わせて火を用い石をもって物を切る事を初めた。ここに初めて人間の

みが利用し得る道具が用いられる様になった。…中略…そこに道具利用の技術と道具を製造する技術とが生来した。而しながら道具の利用は人類の自主独立、自己表現に対する要求のあらわれであり生活に対する実現である事を忘れてはならない。自由運動性が与えた処の道具の利用、即ち広く技術は内的要求の行動であり表現形式であった<sup>25)</sup>。

この言及から、篠崎は、人々が「技術」を生み出してきた背景には、「生活の卓越」や「自主独立、自己表現」のために道具を作り、利用しようという要求が存在していたと考えていたことがわかる。そして、この考察を根拠として、「技術は本来それに内具する精神的意味を保持するものであり、それ故技術は必然的に精神を暗示するものでなければならない<sup>26)</sup>」のように、「技術」を精神的なものとして捉えている。つまり、篠崎は「技術」が人間の要求によって生みだされてきたという認識に基づいて、「技術」を意志や人格の表現と捉えていたのである。

以上のように、篠崎は、まず「技術」の発生的考察によって「技術」を意志や人格の表現と捉えていた。そして、篠原の理論に依拠し、「技術」を習得して意志と身体を統一することが人格陶冶に寄与する体育のあり方と考えたのである。

### 3. 人格陶冶に寄与する「技術」習得の考え方

篠崎は、先述のように「技術」習得と人格陶冶の関係の説明していたが、一方で、体育においては「単なる外形的な技術でなしに人格表現としてのうまさ<sup>27)</sup>が求められる」と述べ、「技術」習得が即人格陶冶になるわけではないことを指摘している。では、どのようにして「技術」習得が人格陶冶に寄与するようになるのか。篠崎は、以下のように述べている。

人間の一挙手一投足も厳密な意味で人格を表現するとすれば凡て之等は深い人格的意味

を包含する技術であり又あらねばならない。故に精神的技術としての体育的技術は人格的技術として、往時の武士が技術の修練に依って武士たるの道のみがいて行った如く或は禅僧が座禅の修練に依って悟の道を求めるが如く、吾々は個々の小宇宙たる人道を表現しつつ悟の境地へまで向う事を理想とせねばならない<sup>28)</sup>。

また、1940（昭和15）年12月の「技術の考察」でも、「往古より技の奥技を窮めたものは又他方に於て高邁なる人格の所有者となり、人間修養に武術や茶の如き形式が用いられた事は当然の事であろう<sup>29)</sup>」と述べ、さらに「技術の深化は、身体の自在なる人格の形成心身一如の形成であって、その深き境地は澤庵禅師の不動智神妙録に於て至細に明快に表現されていると言って過言ではなからう<sup>30)</sup>」としている。つまり篠崎は、武道や座禅、茶道における修練を、人格陶冶に寄与する「技術」習得の理想像と捉え、これら日本古来の修練を理想とすることで、「技術」習得が人格陶冶に寄与するようになって考えていたのである。

以下では、日本古来の修練を理想とした、人格陶冶に寄与する「技術」習得の考え方について明らかにしていく。

#### (1) 運動に対する要求の喚起

先述したように、篠崎は「技術」に意志や人格が現れると考えていたが、それは自己が外界の物と関係を結び、重要な意味づけを行った時においてであった。したがって、どのようにして物に対する意味づけがなされるのかをまず明らかにする必要がある。このことについて篠崎は、1937年3月の「体育要論（三）—意志陶冶論—」で、「個人と物との実際の物理的距離が問題となるのではなく個人が或る事に如何に誘意性を感じ自己に対する意味を発見するかによって環境として重要な位置が与えられるか否かが決定される<sup>31)</sup>」と述べている。この「誘意性」こそが、自己と物との関係であり、「例えば子供が甘い菓子に向ってひ

きつけられるであろうし、業に対しては之をさげようとする態度があらわれる。前者に於ては誘意性が(+)の関係にあるといい、後者即ち分析の場合に於ては(-)の関係にある<sup>32)</sup>という。つまり篠崎は、ある物に対してプラスの誘意性を感じた時、重要な意味づけがなされると考えていた。また、このことが「技術」に人格が現れる前提と考えていたのである。

そして、篠崎は、「誘意性を基礎として各々がある事柄を好み之に引きつけられる様な心的緊張を構成した時吾々は之を意図」といい、「意図の発生からそれが実現せられるまでの全過程<sup>33)</sup>」が意志であると述べている。つまり、「技術」習得による意志と身体の一統あるいは意志の実現とは、発生した意図にかなった運動の実現と捉えることが可能である。そのため、篠崎は1937年4月の「体育要論(四)一意志陶冶論」で以下のように述べている。

体育が意志の陶冶に欠く事の出来ぬ一面を背負い、体育活動が如何に意志発展に資するのであると云ってももろもろの運動に対する意図が発生しなければ一切の体育活動は行われ得べくもない。換言すれば運動したいと言う欲求が現われ自己の運動として自己が行う事を意味するのでなければ意図的活動は発現しないしそれ故意志的活動もあり得る筈はない<sup>34)</sup>。

この言及から、篠崎は、「意志の陶冶」いいかえれば人格陶冶にはまず外界の物や事柄、即ち跳箱や鉄棒などの施設・用具や逆上などの「技術」に対してプラスの誘意性を感じ、運動に対する欲求を喚起することが不可欠と考えていたことがわかる。

しかしながら篠崎は、「欲求は比較的明瞭な目的を持つ要求へまで高めて行かなければならない<sup>35)</sup>」と述べている。では、両者はどのように異なるのであろうか。篠崎は、1939(昭和14)年10月の「体操教授に於ける要求水準(一)」で以下

のように述べている。

要求は欲求を基礎として分化発展したものである。欲求は犬や猫にもあるものであるが、人間ではこれが予想期待などの如く時間的に発展して要求となるのである。欲求は無茶苦茶でもかまわぬ、唯運動がしたいという意志的には極めて低いものであるが要求はどういう運動がしたい、どういう風にやりたいという、より高い段階に導かれているものである。欲求は一時的なもので、動物などは障碍に依ってそれを満足されなくてもいつのまにか消えてしまう(人間も同様)ものであるが要求はそれが満足されないうちは、態度として久しい間緊張状態が残り、いつかの機会を待ちもうけているのである<sup>36)</sup>。

この言及から、篠崎は、欲求は目標が曖昧なため、何らかの障碍によって容易に減少する一時的な意図であるのに対し、要求は目標が明瞭であり、満足されるまで長期的に持続する意図と考えていたことがわかる。そのため、篠崎は、運動に向かう意図が欲求にとどまっている場合には、「体操が非常に好きな児童でも、寒い日や暑い日つかれた時、同じことをくどくど説明されたり、しばしば運動が中断され、やらせてもらえない時は運動欲求は減少するのである。今好きで一生懸命やっていたのに、いつ嫌だと投げ出さぬともかぎらない<sup>37)</sup>」と述べている。一方、要求が喚起された状態では「比較的長い間緊張状態を保っていて、今何かの都合でうまく運動出来なくても又次の機会にやろうとする<sup>38)</sup>」という。また、「要求は一度び満足され緊張が解消されると更に高い段階の要求をよびおこして来るものである<sup>39)</sup>」と述べている。これは、「技術」習得に即していえば、ある「技術」を習得するまで練習し続けることであり、また習得後も出来栄を高めることやより難しい「技術」習得に向って練習し続けることであると考えられる。篠崎は、「体操教授に於てかかる包括的な緊張状態を起し保たせることは

最終の美であるといつてよい」<sup>40)</sup>と述べており、緊張状態を保たせること、つまり要求を喚起することをいかに重視していたのが明確である。

以上のことから、篠崎は、運動に対する要求を喚起すること、即ち明瞭な目標をもち運動に向かう意図を長期間保持することが、「技術」習得が人格陶冶に寄与するために不可欠と考えていたことがわかる。

## (2) 意志動作

先述のように、篠崎は、意志を「意図の発生からそれが実現されるまでの全過程」と捉えていた。そこで、以下では、発生した意図すなわち欲求や要求がどのように実現されるのかを明らかにしていく。篠崎は、「体育要論（四）—意志陶冶論—」で、意図の実現に向けて行われる動作を「意志動作」と呼び、「完全に意図に向う動作」としての「意図的動作」と「意図を圧迫しようとする動作」である「自制的動作」<sup>41)</sup>の二つからなると述べている。具体的には以下のようである。

意図的動作の特徴は自己を対象に向って動かす事であり、之に向って努力する事である。然るに後者即ち自制的動作にあつては常に圧迫と抑圧とであるが故にそれは対象に引きつけられまいとする反抗を特徴とする。それ故意志の内容は提示せられた対象に向って意識的に熱望する事であり活動的に努力する事を意味し更に之に対して抑圧反抗する力を意味するものである<sup>42)</sup>。

この言及からは、「意図的動作」と「自制的動作」は相反するもののように思われるが、篠崎は、「自制的動作」と称せられるものは多く何等かの理念を目標とし又は信念に関係している点に於ては意図的動作に類似し目標や信念を積極的に実現する前にそれに有害なる欲求を禁止し抑圧せんとするのである<sup>43)</sup>と述べている。つまり、「技術」習得を目指した練習における「自制的動作」とは、「技術」習得に有害なる欲求を抑圧すること

であり、「意図的動作」と同様、「技術」習得を目指して行われる動作と捉えることが可能である。篠崎は、「体育が真に意志の陶冶に役立たんが為には積極的な意図動作のみでも消極的な自制的動作のみでもいけない」<sup>44)</sup>と述べており、「意図的動作」と「自制的動作」の二つによる「技術」習得が「意志の陶冶」いいかえれば人格陶冶に寄与するために不可欠と考えていたことがわかる。

篠崎は、以上のように「意志動作」について捉えたうえで、「技術」習得の理想像としていた武士の修練について取り上げ、以下のように述べている。

武士道の精神こそは誠に意志陶冶の体育であつた。藤原氏と平氏は榮華と恋愛に耽り、果しなき欲求の奴隷となつて滅亡せねばならなかつた。…中略…かくて先刻を戒めた東国武士は、武を磨き身体を錬磨することに依つて積極的に外へ働く意志（意図的）を錬磨し、寡欲を以て内なる欲求を制しつつ自制的意志を修練したのである。キリスト的禁欲主義は只管外的情慾を抑制する事にのみ腐心して内的実践力を失うに致つた（原文ママ）。けれ共武士にあつては実践力を培養する為に寡欲と儉素を尊重したのである。かかる武人の理想は、体育的に見るならば、理想実現の為に強度の鍛錬に耐え、如何なる苦心をも抑圧して道をはげむ事に於て体育に依る意志の陶冶であつたといえよう<sup>45)</sup>。

このように、篠崎は武士の修練を、「意図的動作」と「自制的動作」の二つからなる「意志動作」であると捉えていた。したがって、篠崎は、要求の実現に向けて努力する「意図的動作」と、有害な欲求を抑圧する「自制的動作」によって「技術」を習得することで、人格陶冶に寄与することが可能になると考えていたことがわかる。

## 4. 実践理論への具体化

最後に、これまで明らかにしてきた「技術」習

得に対する考え方を篠崎がどのように実践理論に具体化していたのかを明らかにしていく。

### (1) 要求喚起の具体化

要求の喚起については、徒手体操、器械体操、遊戯において言及がみられた。以下、教材ごとに内容を検討していく。

#### ① 徒手体操

篠崎は、1937年11月の「体操に対する好き嫌いとその理由」で、「好きであることは最も強い要求と態度とを造る最良の方法であり、最近叫ばれている民衆体育も或は体育に依る人格陶冶もここから初められるであろう」<sup>46)</sup>と述べている。この言及から、篠崎は、運動を好きにさせることによって運動に対する要求を喚起しようと考えていたことがわかる。しかし、篠崎は、1939年11月の「体操教授に於ける要求水準(二)」で、「徒手体操が遊戯や器械運動より好まれない傾向」<sup>47)</sup>があると述べ、1940年1月の「徒手体操教授の悩みとその解決」でも、「どうしたら徒手体操を児童の要求に応じて教授することが出来るか」<sup>48)</sup>が当時の体操科授業の問題になっていたことを指摘している。つまり、徒手体操は他の教材と比べて児童・生徒の要求を喚起することが難しいと考えていたのである。

篠崎は、その理由を「目標があまりにも抽象的で漠然として」おり、「成功失敗ということを直接に実証出来ない」ため、「徒手体操にあっては自己の進歩の度合がわからないという点に難点がある」<sup>49)</sup>と述べている。そのため、篠崎は、徒手体操においては「どれだけ合目的な動作が出来るかということ『どれだけうまくなったか』という二つのことを鑑賞し得る眼を養う事が大切で」あり、それには「直接の目標を『誰さん位に上手に』『誰さん位正確に』『誰さん位なめらかに』等を各自にもたせる事」<sup>50)</sup>が効果的であると述べている。ここでいう、「どれだけ合目的」か、「どれだけうまくなったか」ということは「技術」の出来栄や進歩と捉えることが可能である。つまり、徒手体操に対する児童・生徒の要求を喚起す

るためには、他の児童・生徒を目標にすることにより、自己の「技術」の出来栄や進歩を自覚させることが重要と考えていたのである。

篠崎は、このように徒手体操の指導について捉えたうえで、「徒手体操教授の悩みとその解決」で四つの方法を紹介している。まず、第一の方法について以下のように述べている。

「さあ、しっかりはじめよう…はい！」で、みんな一度に始める。先生は呼称をつけながらみんなのやり方をよく見る。よく目的にかなっているもの、不恰好なもの、努力の足りないもの一色色あるであろう。そのうちで必ず一人か二人、実に立派にやっているものが先生の目にとまると思う。そうしたら先生は「誰君は大へんよくやっている。さあ誰君の方をむいてやって見よう。」といいながらその方を指す。その時児童はすぐ指された人の方を向き、その人を中心として「止め」があるまで運動を継続(原文ママ)する<sup>51)</sup>。

つまり、「技術」の優れた児童・生徒を指名し、他の目標にするということである。また、この際に、「『誰君のは大変立派だね、みんなよく見ながらやりなさい』とか『臂がよく早く挙って来るね』(側屈)とか『伸び切っている!』という風な短評をしてやると尚いい」<sup>52)</sup>と述べている。篠崎は、この方法によって臂の挙げ方や伸びているかどうか等の明瞭な目標を与え、優れた児童・生徒と自己を比較させることにより、各々の出来栄を自覚させようとしていたのではないかと考えられる。

第二に、篠崎は、「指名した中心児童の示範を観察させる方法」をあげている。この方法では、教師は「『さあ誰君のは非常に立派に出来ているから一つやってもらおう…止め!はい誰君』と指名して、そのものに運動を続けさせ他のものは運動を止めて、見るということに専心する」<sup>53)</sup>という。第一の方法では模範となる児童・生徒と同時に練習させていたのに対して、この方法では観察

することに主眼を置いていることがわかる。篠崎は、その意図について以下のように述べている。

生きている人間自身の体操たる以上、心身のよりよき統一、それがなければならない。かかる統一こそ合理的なるものを含みつつそれを超越する気品や美しさを具えるものであり、一切の修練はこの一点に向って凝集せられるのである。けれどもかかる気品は何人にも直ちに感ぜられるものではない。自己の姿は仲々自己にはわからぬものなのである。そこで自分の同僚がどういう風にやっているかを、よくまなこを開けて見るということが極めて大切な事になる。成程誰さんのやり方は自分達が今まで考えていた世界とちがったものをもっているということを感じさせるのである…中略…自分も誰君位うまくやってみようという自覚、こうした自覚が積り積って自然に自己の気品をきざきあげて行くのである<sup>54)</sup>。

この言及から、「心身のよりよき統一」すなわち人格陶冶を目指していることがわかる。また、自己の出来栄えがわかりにくいという問題を、他者と比較することで解消し、「誰君位うまくやってみよう」という要求を喚起しようとしていることがわかる。

続いて篠崎は、第三の方法として、特定の児童・生徒に示範させるのではなく、「一人一回ずつ次々と示範させて行く方法」<sup>55)</sup>をあげている。そして、第四の方法では、「四五人又は十人位のグループ」をつくり、「グループがやっている時は他のものはよく観ている」<sup>56)</sup>ように指導すると述べている。いずれも、児童・生徒同士で「技術」を観察し合うことが意図されている。

以上のように、篠崎は、徒手体操に対する要求を喚起するためには、自己の「技術」の出来栄えや進歩を自覚させることが重要と考えていた。具体的には、上手な児童・生徒を目標にしたり互いに観察し合ったりして、「技術」の出来栄えを比

較する方法が効果的と考えていたのである。

## ② 器械体操

続いて、器械体操の実践理論において、要求の喚起という考え方がどのように具体化されていたのかを検討する。篠崎は、「体操教授に於ける要求水準(二)」で児童・生徒の器械体操に対する要求について以下のように述べている。

器械体操は要求水準を高めて行く上に非常に都合よい構造を為している。それは器械体操の教材は出来る出来ないとの間に明瞭な一線があるからである。だから先ずその教材をまがりなりにも「出来る」程度に練習することがだれにでも与えられる要求の水準となるのである鉄棒であれば「あがれる」ということ、跳箱であれば「跳び越せる」ということ、それが最初の要求水準となる。この水準は主観的にも客観的にも非常に明瞭な目標であるから、児童はこれには是非成功したいものと強い要求を起すのである。…中略…然しこの時に教師は単に「あがれた」「跳びこせた」という以外にもっともっと気持ちよい世界が、もっと立派な世界があることを知らせなければならない。「もっと楽な気持ちであがれ」とか「もっとすなおに」という水準を与える。かくして水準の高まる世界があることを児童自身が知って来れば、水準は次々と高くなって行き止るところを知らない<sup>57)</sup>。

篠崎は、器械体操はできる、できないが明瞭という特徴をもつため、要求を喚起しやすいと考えていたのである。また、児童・生徒は第一に、成功したい、できるようになりたいという要求を起すため、まず「まがりなりにも『出来る』」ということを目標にし、続いて出来栄えを高めるという順番で練習させることが器械体操に対する要求を喚起するうえで効果的と考えていたことがわかる。

しかしながら、篠崎は「体操教授に於ける要求

水準（一）」で、器械体操に対する要求の水準は各人各様であり、「蹴上がうまく出来ないと満足しない子供もあれば、逆上が出来たといって大喜びをしているものもある。跳箱でもようやく跳びこせることを以て満足するもの、五段も六段も高いものを跳びたいもの、力や姿勢や気分が整わなければうまく出来たと思わないもの」<sup>58)</sup>がいることを指摘している。そして、「水準を高くもちすぎると如何に練習しても水準に達しないで、自分にはとても出来ないと感じ、練習中止の傾向を生む。…中略…又之に反し要求水準が低きに失すれば児童には直ぐに満足の情があらわれ、練習も進歩も行われまいであろう」<sup>59)</sup>と述べている。練習が中止されてしまうということは、練習に向かう意図が一時的な欲求の段階にとどまっているといえる。つまり篠崎は、器械体操を、要求を喚起しやすい教材と評価しながらも、各々の能力に応じた「技術」習得を目指すことが不可欠と考えていたのである。

篠崎は、このように器械体操の指導について捉えたうえで、具体的な方法を、蹴上を例にあげて以下のように述べている。

いくら練習しても最初の水準に到達しないいわゆる力の足りない子供は水準をそれより以下に押し下げてやらねばならない。たとえば蹴上がどうしても上れない子供にはその基礎になる逆上り、脚懸上（特に高鉄棒）等に下げる。或は「振り方」「脚をもちあげるところ」「蹴り方」という風な一つ一つの最も具体的なるものに要求の水準をつけてそれ等の一つ一つを満たすことに依って全体の水準に到達させることが大切である<sup>60)</sup>。

つまり、児童・生徒にとって目標とする「技術」習得が難しすぎる場合には、より簡単な「技術」に目標を変更することや、「技術」をいくつかの要素に分解し、段階的に習得させるようにすることが効果的と考えていたのである。

また、1940年10月の「体操教授の手記（完）一

器械の運動一」では、脚懸上を例にあげ、以下のように述べている。

脚をかけて棒上にあがるという事はだまっても誰れにでもわかる。凡てのものがここに向って努力するわけである。けれども凡てにその努力がむくいられるとは限らない。そこで仲々水準まで到達しないもののために、脚をかけるという事を先ず第一の目標とするとか、脚をかけて正しく振る練習という風に、水準に達するためにどうしても通らなければならぬ関門を、その時間の努力点と定めて漸時之を推し進めて行くのである。かくて水準に到達すれば一步を進めて一度の振動で上る事を目標とし更に片足踏切から両脚踏切に向って努力するという事にすれば、脚懸上という教材はどれ程長く連続されようと、練習の内容に於ては常に新しい課題として児童の意志を換越（原文ママ）し得る<sup>61)</sup>。

ここでも、ある「技術」が習得できない場合には、いくつかの段階に分け、徐々に習得していく方法が効果的と述べている。一方、一つの水準に到達した場合には「一度の振動で上る」ことや「片足踏切から両脚踏切に向って努力する」というように、出来栄への向上を目標にすることで徐々に高い要求を喚起することが可能になると考えていたのである。

以上のように、篠崎は、器械体操においては、できるようになることを最初の目標にし、続いて出来栄を高めるように指導することが要求を喚起するために効果的と考えていた。また、その際に、各個人の能力に応じた目標を与えることが不可欠と考えていたのである。

### ③ 遊戯

篠崎は、「遊戯は狩猟本能、逃走本能、争闘本能等種々な本能的欲求から出発しているものが多い」ため、「高い程度の要求というよりもむしろ欲求的、衝動的範囲を出でないものである」と述

べている。例えば、「球を目的に向ってはこぶという要求よりはむしろ、無茶苦茶に手足を動かしたり、他人ととりくもうという運動衝動、争闘本能」<sup>62)</sup>が現れるという。

先述したように、篠崎は、人格陶冶に寄与するためには運動に向かう意図を欲求から要求にまで高めることが不可欠と考えていた。そのため篠崎は、遊戯においては、「如何に之を欲求から要求の場面へ衝動から意志的な場面へ発展させるかが重大問題となる」とし、以下のように指導することが重要と述べている。

初めは全然無規則の状態から次第に規則を定め、造りしながら次第に遊戯目標への統制に入らなければならない。これ即ち遊戯目標への要求発生である。かくて生じた要求の水準は先ず「勝つ」ということの中におかれる。然るに勝つためには如何なる行動をも許すというものではないから、勝つ前に「如何に合法的に」「如何に立派に」という水準を与えなければならない。前者に依れば無数の基本練習と技術の進歩が考え出され、後者に在っては無限に高い人間的な深さが考え得られる。

それ故凡ゆるスポーツの修練に於ても勝つことに目標水準をおきつつも、行為的な要求水準は常に合法性と立派にという二つにおかなければならない。時としては勝つという水準を追いぬいて行為的水準が高まり、自己の将来の技術的な進歩とか、人間性というものを擁護するために、勝つことを放棄することさえある。それはそうあることがほんとうである<sup>63)</sup>。

篠崎は、無規則な状態から次第に規則を定めていくことによって、遊戯に向かう意図を「本能的欲求」から、「勝つ」という明瞭な目標をもった要求へ高めようとしていたのである。また、「合法的に」勝つという要求を喚起することで、「技術」習得が目指されるようになると考えていたこ

とがわかる。

しかしながら、篠崎の遊戯に関する言及はわずかであり、具体的な方法については述べていない。また、遊戯の実践理論においては、「本能的欲求」を、遊戯目標に対する要求にまで高めることに主眼が置かれており、本研究で対象としている「技術」習得については、わずかに、「合法的に」勝つという要求と結びつけて論じられているにすぎない。加えて、「技術の進歩」が「立派に」勝つ、あるいは「人間的な深さ」ということとは区別して論じられており、人格陶冶との結びつきも不明確である。

## (2) 「意志動作」の具体化

先述のように、「意志動作」とは、要求の実現に有害な欲求を抑圧しつつ、努力することであった。このような考え方は、器械体操と教練において論じられていた。以下二つの教材について検討していく。

### ① 器械体操

器械体操において、「意志動作」の考え方は、「体操教授に於ける要求水準(二)」の以下の言及にみられる。

器械体操は運動場の花である。この水準は徒手体操のように一回や二回の練習で苦もなく到達出来るというものではない。何回も何回も失敗し或いは殆んど水準を満したかの如く、も少しで出来るぞという希望をもたせ、又出来たり出来なかつたりという状態がしばらくつづいてとうとう成就するものである。この時の児童の喜びは大きい。長い間一つの水準を目指して殆んど己に言いきかせる如く努力するという事は、恐らく他の教科には見られない意志表現的な場面であろう<sup>64)</sup>。

注目すべきは、長い間「技術」習得に向けて努力することが器械体操の特徴と考えていたことである。「も少しで出来るぞという希望」をもって練習し、「技術」習得の結果大きな喜びを味わ

うと述べているため、ここでいう努力とは、「技術」習得という要求の実現に向けた努力であり、「意志動作」の積極的側面である「意図的動作」と捉えることが可能である。また、篠崎は、「体操教授の手記（完）一器械の運動一」でも、「器械の指導では、一つの教材を一学期二学期、長きは一年二年とたゆまず努力して仕上げるものが多いのである。同一教材を毎時間毎時間練磨して行く事が特徴である」<sup>65)</sup>と述べており、長期間の努力によって「技術」習得を目指すことが器械体操の特徴と考えていたことが明確である。

以上のように、器械体操の実践理論においては、「意志動作」の積極的側面、すなわち要求の実現に向けて努力する「意図的動作」の考え方が具体化されていた。しかしながら、「意志動作」の消極的側面とされる「自制的動作」すなわち「技術」習得に向かう際にどのような有害な欲求が存在し、それをいかに抑圧していくのかということについては言及していなかった。

## ② 教練

篠崎は、「教練の場面は服従の場面で」あり、例えば『『気ヲ著ケ（原文ママ）』』という一つの場面の力に自らを服することを意味するのである。だから早く遊戯がやりたいという欲求をもっている、要求水準のピントを自ら新しい場面『気ヲツケ』に合わせなければならない<sup>66)</sup>と述べている。つまり、児童・生徒に対し、「遊戯がやりたい」という欲求を自ら抑圧し、「気ヲツケ」に向かうことを要求しているのであり、この例示には、「意志動作」の消極的側面である「自制的動作」の考え方が現れている。

しかし、どのようにして「気ヲツケ」に対する要求を喚起し、習得に向かわせるのかという具体的な言及はみられなかった。

## おわりに

本研究では、学校体育に「技術」習得が定着していく要因の一端を明らかにするため、篠崎謙次の論考にあたり、人格陶冶に寄与する「技術」習

得がどのように考えられていたのかを検討、考察してきた。以下、本論の要点を示し、目的に即して考察を加える。

第一に、篠崎は、篠原助市の理論や「技術」の発生的考察に依拠し、「技術」習得と人格陶冶の関係を説明していた。具体的には、「技術」を意志や人格の表現と捉え、「技術」習得によって意志と身体を統一することが人格陶冶に寄与する体育のあり方と考えていた。

第二に、篠崎は、「技術」習得が人格陶冶に寄与するためには日本古来の修練を理想とすることが必要であり、以下の二点が不可欠と考えていた。一つめは、運動に対する要求を喚起すること、いいかえれば、明瞭な目標をもち、運動に向かう意図を長期間保持することである。二つめが、「意図的動作」と「自制的動作」からなる「意志動作」である。具体的には、要求の実現に向けて努力することと、有害な欲求を抑圧することである。以上の考え方に基づいて「技術」を習得し、意志と身体を統一することで、人格陶冶に寄与することが可能になると考えていたのであった。

第三に、人格陶冶に寄与する「技術」習得の考え方が実践理論にどのように具体化されたのかを検討した結果、徒手体操と器械体操の実践理論の中で「技術」習得に対する具体的な言及がみられた。まず、要求の喚起について、徒手体操においては、優秀な児童・生徒を目標にしたり観察し合ったりして、「技術」の出来栄を比較する方法が効果的と考えていた。一方、器械体操においては、最初ではできるようになることを目標にし、その後出来栄を高めるように練習することが効果的としていた。また、各個人の能力に応じた「技術」を習得することが不可欠と考えていた。次に、「意志動作」については、器械体操において、一つの「技術」を長期間努力して習得することが強調されており、「意志動作」の積極的側面である「意図的動作」が具体化されていた。しかし、要求の実現に有害な欲求を抑圧するという「自制的動作」については言及がみられなかつ

た。

「技術」習得が人格陶冶に寄与するためには、二つの要素が不可欠とされていた。一つは、運動に対する要求を喚起することであり、もう一つは、「意志動作」であった。特に、「意志動作」は、「意図的動作」と「自制的動作」に二分されていたが、「自制的動作」に関する説明は欠いていた。つまり、この「自制的動作」に関しては、論説上は展開されていなかった。篠崎が「自制的動作」に言及していなかった理由は不明であるが、このことから、人格陶冶に寄与するための「技術」習得は、未完成であった可能性が高い。

しかしながら、人格陶冶に寄与するために不可欠な二つの要素の一方である、要求を喚起することに力点が置かれた実践理論は、別の観点からみれば、1920-30年代に論じられていた、運動への興味を高めるために「技術」習得が有用であるという考え方<sup>67)</sup>の継承、連続と解釈することが可能である。つまり、1936年以降の体操科授業においても、運動に対する興味や要求を喚起するという有用性が、「技術」習得の主たる定着要因となっていたのではないかと考えられる。なお、篠崎の実践理論が、「技術の末」と批判されていた従来の体操科授業実践をどのように変えたのか、あるいは変えることが出来なかったのかということは今後の課題とする。

## 注および引用・参考文献

- 1) これまで、運動技術・運動技能を重視した体育に対して、「半ば強制的な体力や技術のトレーニングを目標とする授業が、結局は『体育嫌いのスポーツ好き』を再生産する」(菊幸一「現代社会における教育課題と『楽しい体育』」全国体育学習研究会編『『楽しい体育』の豊かな可能性を拓く―授業実践への手引き―』明和出版、2007年、44ページ)や、「個人差を配慮することなく、すべての学習者に一律的な技術を学習することを強いた結果、技能を身につける意味そのものが理解されなかったり、使いみちのわからない技能の学習を強いたり、まったく身につかない児童生徒を生み出す事態などが生じていた」(八代勉「『楽しい体育』は技能軽視の体育か」、同上書、16ページ)、「『できる・できない』あるいは『うまい・へた』そして『強い・弱い』といった冷酷な二分法に集約されていく」(阿部悟郎「学校体育論議の一方向―有用性の論理を超えて―」『体育・スポーツ哲学研究』第30巻2号、128ページ、2008年)との批判がみられる。  
一方、運動への興味を重視した体育に対しても、「技術的学習内容の関連的・発展的学習が行われないケースがしばしば生じる」(高橋健夫「めあて学習の意義と問題点」『体育科教育』第45巻4号、16ページ、1997年)との批判がある。現在は、これらの批判を乗り越え、運動の魅力を味わいながら運動技術・運動技能を身につけることが目指されている。
- 2) 現代の学校体育で指導内容とされている技術は、「運動経過の合目的形態」であり、厳密には運動技術と呼ばれるものである。しかし、本研究で対象とする1936年以降における体操科の史料を概観すると、単に「技術」と述べられることが多く、また、「技術がうまい」のように、個人的な状態としての運動技

- 能と混同して用いられることもある。そのため、本研究では、運動技術と運動技能の両方を含む用語として「技術」を用いることとする。
- 3) 『官報』第147号、536ページ、1913年1月28日。
  - 4) 『官報』第4126号、684ページ、1926年5月27日。
  - 5) 文部省「学校体操教授要目改正の要旨並改正の要点」『文部時報』第577号、135ページ、1937年3月1日。
  - 6) 「技術の末」に走ることが「学校体操教授要目」などで繰り返し戒められていたことについては、井上一男『学校体育制度史』増補版、大修館書店、1970年、岸野雄三・竹之下休蔵『近代日本学校体育史』東洋館出版、1959年〔『近代日本学校体育史』日本図書センター、1983年〕などで触れられている。
  - 7) 藤川和俊「1920-30年代の体操科授業における『技術』習得の定着要因—大谷武一と二宮文右衛門の著書を手がかりとして—」『体育史研究』第32号、10ページ、2015年。
  - 8) 同上、10ページ。
  - 9) 入江克己『日本ファシズム下の体育思想』不味堂出版、1986年、154ページ。
  - 10) 同上、154-155ページ。
  - 11) 「発刊の辞」『小学校体育』第1巻第1号、1ページ、1936年。
  - 12) 山田栄・小沼洋夫・篠原重利編『小・中学校における道徳実践指導講座』第3巻、光風出版、1956年、429ページ。
  - 13) 篠崎謙次『改訂道徳教育要説—内面的自覚の精神過程とその指導—』高陵社書店、1970年、著者略歴欄。
  - 14) 愛媛大学教育学部附属小学校『百年史』編集委員会編『百年史』愛媛大学教育学部附属小学校、1986年、1176ページ。
  - 15) 同上、718-719ページ。
  - 16) 篠崎謙次「体操科の研究教授について」『小学校体育』第3巻7号、69-70ページ、1938年。
  - 17) 篠崎謙次「体操教授の手記（三）—教授の力動的進行—」『体育と競技』第19巻9号、40ページ、1940年。
  - 18) 篠崎謙次「体育要論（一）」『体育と競技』第15巻11号、3ページ、1936年。
  - 19) 同上、3ページ。
  - 20) 同上、4ページ。
  - 21) 同上、8ページ。
  - 22) 篠崎謙次「体育要論（五）—意志陶冶論—」『体育と競技』第16巻5号、13ページ、1937年。
  - 23) 前掲「体育要論（一）」、8ページ。
  - 24) 篠崎謙次「体育要論（二）」『体育と競技』第15巻12号、23ページ、1936年。
  - 25) 同上、24ページ。
  - 26) 同上、25ページ。
  - 27) 同上、20ページ。
  - 28) 同上、90ページ。
  - 29) 篠崎謙次「技術の考察」『体育と競技』第19巻12号、63ページ、1940年。
  - 30) 同上、68ページ。
  - 31) 篠崎謙次「体育要論（三）—意志陶冶論—」『体育と競技』第16巻3号、10ページ、1937年。
  - 32) 同上、11ページ。
  - 33) 同上、11ページ。
  - 34) 篠崎謙次「体育要論（四）—意志陶冶論—」『体育と競技』第16巻4号、10ページ、1937年。
  - 35) 前掲「体育要論（三）—意志陶冶論—」、12ページ。
  - 36) 篠崎謙次「体操教授に於ける要求水準（一）」『小学校体育』第4巻10号、35ページ、1939年。
  - 37) 同上、35ページ。
  - 38) 同上、36ページ。
  - 39) 同上、36ページ。
  - 40) 同上、36ページ。
  - 41) 前掲「体育要論（四）—意志陶冶論—」、7

- ページ。
- 42) 同上、9 ページ。
- 43) 同上、8 ページ。
- 44) 前掲「体育要論（五）—意志陶冶論—」14 ページ。
- 45) 同上、15ページ。
- 46) 篠崎謙次「体操に対する好き嫌いとその理由」『小学校体育』第2巻11号、24ページ、1937年。
- 47) 篠崎謙次「体操教授に於ける要求水準（二）」『小学校体育』第4巻11号、80ページ、1939年。
- 48) 篠崎謙次「徒手体操教授の悩みとその解決」『小学校体育』第5巻1号、71ページ、1940年。
- 49) 前掲「体操教授に於ける要求水準（二）」、81ページ。
- 50) 同上、82ページ。
- 51) 前掲「徒手体操教授の悩みとその解決」、75ページ。
- 52) 同上、76ページ。
- 53) 同上、77ページ。
- 54) 同上、76-77ページ。
- 55) 同上、77ページ。
- 56) 同上、77-78ページ。
- 57) 前掲「体操教授に於ける要求水準（二）」、82-83ページ。
- 58) 前掲「体操教授に於ける要求水準（一）」、37ページ。
- 59) 同上、37ページ。
- 60) 前掲「体操教授に於ける要求水準（二）」83ページ。
- 61) 篠崎謙次「体操教授の手記（完）—器械の運動—」『体育と競技』第19巻10号、48ページ、1940年。
- 62) 前掲「体操教授に於ける要求水準（二）」、83-84ページ。
- 63) 同上、84ページ。
- 64) 同上、83ページ。
- 65) 前掲「体操教授の手記（完）—器械の運動—」、
- 47ページ。
- 66) 前掲「体操教授に於ける要求水準（二）」、82ページ
- 67) 前掲「1920-30年代の体操科授業における『技術』習得の定着要因—大谷武一と二宮文右衛門の著書を手がかりとして—」、9-10ページ。